

ビルマの古代史について

平 川 紀 一

1 史料の問題

ビルマ史の時代区分は社会経済史的観点から見て、西欧や日本の歴史のように明確な規準があるわけではない。したがってビルマの古代史といっても、いわば便宜的な名称であって、ここでは Anawrahta 王により Pagan 王国、一名建寺王朝の建設された 1044 年以前を指す。

ビルマ史に関する土語の文献資料は、1044 年以後になるとかなり確実なものとなってくるが、それ以前については若干の碑文を除き、ギリシア・ローマ・アラブ・インド・シーラン(セイロン)・シナなどの文献に見える零細な、また時にはたがいに矛盾した記述を利用するほかはないのである。

これまでにビルマで発見された最も古い碑文は、古都 Prome の東南 5.5 マイルにある古蹟 Hmawza (旧 Prome) に近い Maunggan という小さな村で 1897 年に発見された 2 枚の金板および 3 個の石彫である。同種のものには 1926 年 Ch. Duroiselle によって発見された 20 枚の金葉の写本があり、いずれも 6 世紀初頭あるいはそれよりいくらか早い時期のものとされている。これらの碑文の文字は 5~6 世紀のころインド西岸 Goa 付近の Canara で用いられた Kadamba 文字に酷似し、古代の Kanara-Telugu script に属するもので Pyu script と呼ばれている。その内容は Pāli 経典の抜萃で、冒頭に周知の教条 “Ye dhammā hetuppabhavā tesam-hetum-Tathāgato āha…” (万象は一因より出ず、仏陀はその因を解明す……) とあり、紀元 500 年のころ Prome を中心に Theravāda Buddhism (上座部仏教=小乗仏教) の行われていたことを証明している。また Prome で発見された同様に古い祈誓額の中には、仏陀を中心に観音と弥勒を脇師とした三尊形式に、Sanskrit の書写体である Devanāgarī 文字で銘文の刻まれたものがあり、同じころに大乘仏教も並んで行なわれていたことを示している。

このように最も確実な史料である碑文に関する限り、現在までのところ紀元 500 年以前に遡ることはできないのであるが、これに対して Hmannan Yazawin (玻璃宮年代記) をはじめとするビルマ語・アラカン語・シヤン語・タイ語などの土語による

年代記は、ビルマの建国をはるか古代に遡らせている。しかしその多くは牽強附会の創作であって、ほとんど信じるに足りない。

ところがギリシア・ローマ・インド・シナなどの古い文献には、ビルマやその周辺の事情について、紀元前後ころにまで遡りうる記録が残されている。その多くはきわめて零細なものであり、また直接に目撃した者によったところよりは、間接的な伝聞に基づくものが大部分であるため、はなはだ曖昧な表現に終わっている場合が少なくない。しかも長い時間を経過しているから、今日伝わっているものが、どこまで原典の内容形式を忠実に伝えているかについても、よほどよく検討しなくてはならない性質のものである。しかしながらそれらの文献は、伝説の雲に覆われているビルマ古代史の史料としては、今のところ最も信頼性の高いものである。それはあたかも8世紀の初めごろに書かれた古事記や日本書紀よりも、3世紀に晋の陳寿の撰した魏志倭人伝の方が、その当時の日本の社会のようすを、より正確に記録していると考えられると同様であろう。

ビルマ古代史に関する外国人の記録の中で、質量ともに最もすぐれているのはシナの文献であるが、その内容のあらましについては後に述べるとして、それ以外の文献についてごく簡単に触れておくことにしたい。

1世紀の中ごろ（ローマ帝政期）の著作とされているギリシア語の奇書たる無名氏の「エリュトラー海案内記」の第63節にはガンジズ川のさらに東方に Chryse（黄金）という島（実は半島）があると書かれており、Chryse は一般にマライ半島の根部、もしくは下ビルマのマライ半島に接する部分と推定されている。また2世紀のアレクサンドリアの地理学者 Ptolemaios Klaudios の有名な「地理書」には、やはりガンジス川の彼方にある地方として、Chryse Chora（黄金国）と Chryse Chersonesus（黄金半島）とが明らかに区別して述べられており、前者は後者の北に位置づけられていることから、それぞれ下ビルマおよびマライ半島に比定されている。

おもしろいことにはインドの古い文献には Chryse に対応する物語がたくさんに伝えられている。すなわち Sanskrit 文献の Suvarṇabhūmi や Suvarṇadvīpa, Pāli 文献の Suvannabhūmi は黄金国・黄金島の意味であって、その推定位置もギリシア・ローマ文献の Chryse と符合する。というよりはインドの伝承が西方に伝えられ、ギリシア・ローマの文献に反映していると見るべきであろう。インドの古文獻は一般にその内容の非歴史的なことで名高く、史実と神話・伝説の類が混沌として語られているため、どこまでが本当にあったことなのか、またいつごろ成立したものであるのかを明かにするのは容易なことではない。さいわいなことに紀元前2世紀後半ごろに

アフガニスタンから北インドに勢力を及ぼし、ギリシア文化の影響をインドに及ぼしたギリシア人 Menandros (Pāli の Milinda) 王が、仏教に帰依するにいたった過程をインド僧 Nāgasēna との問答を通じて述べている Pāli の伝典 Milindapañha (弥蘭陀王問経・漢訳は那先比丘経2巻) の中に、シナまでの経由地として Suvaṇṇabhūmi を挙げているので、その名称の起原の下限は明かとなった。このほか前3世紀ごろの伝説によっているといわれる Jātaka (本生譚) をはじめ、Kautilya (前4世紀～3世紀) の Arthasāstra (実利論), Mahākarmavibhāṅga, Divyāvadāna, Mahāniddesa などにも黄金国に言及したところがある。R. C. Majumdar は Suvarṇabhūmi がビルマ・マライ半島およびスマトラを、Suvarṇadvīpa がスマトラやその周辺の諸島嶼を指すものであると主張するのに対して、Niharranjan Ray は両者の区別が次第にはっきりしていったということから、Suvarṇabhūmi がほぼ下ビルマの一地方を指しているという説を支持しようとしているかに思われる。

けれどもかりに Suvarṇabhūmi がビルマのどこかを指していることが明証されたところで、それはビルマが黄金国という名称でインドや、さらにその西方に伝えられたというだけのことであって、ビルマ古代史の内容をそれほど豊富にすることではない。ところがこの問題と、次に述べる Aśoka 王 (前268～232年ごろ在位。阿育王) による仏教伝道がビルマに対しても行われたという説話とが結びつくとなると、問題はまた別であろう。ビルマ人の年代記や伝承は、くりかえしてこのことを強調しているが、その主な拠りどころはシーラン島の年代記 Dipavaṃsa (島史) と Mahāvaṃsa (大史)、ことに後者である。その第12章によると Asoka 王の師であった Moggaliputta Tissa (目犍連帝須) が Pāṭaliputra (華子城) における第3結集の後各地に伝道師を派遣したことを記した中に、Soṇa と Uttara との2人を Suvaṇṇabhūmi に派遣したと述べられている。この伝道が事実であり、かつここで言及されている Suvaṇṇabhūmi がビルマを指すのであれば、ビルマに仏教の伝わった時期を紀元前3世紀まで遡らせることができるわけである。これはビルマの地理的位置や、古くから盛んに行われていたインド人の商業活動などから見て、大いにありそうなことなのであるが、残念ながら事実と認定するにはいくつかの障壁がある。第1に紀元500年以前に遡る仏教遺物・遺蹟は、これまでのところビルマで発見されていないことである。第2に Aśoka 王自身が建てさせた石柱や磨崖の法勅の刻文の第5章・第13章は、彼が伝道師を派遣したシリア・エジプト・マケドニア・キレーネー・エペイロス・シーランなどの国名を挙げているが、ビルマに比定すべき Suvarṇabhūmi の名は挙げられていないことである。第3に現在のビルマ仏教の建設者である Pegu の Dham-

maceti (Dammazedi) 王が、ビルマ仏教の由来を詳細に述べている 1476 年の Kal-yāni 碑文で、Aśoka のビルマ伝道に全く触れていないことである。これらの中どれか一つだけに反論するというのであれば、それは必ずしも困難ではあるまい。しかしそのすべてを否定して Aśoka のビルマ伝道を事実であるとするためには、よほど積極的な証拠を必要とするであろう。

時代は下るがデカン地方のかつての Andhra 国内の Nāgārjunikoṇḍa で発見された碑文の一つに、3 世紀の Ikṣvāku 朝の Māḍhariputa Śrī Virapurisadata に比定される国王の治世 14 年のものがあるが、その中に Cilāta という国名が現われる。この Cilāta はサンスクリット文献の Kirāta で、Arakan と下ビルマの地方に比定され、この地方で 3 世紀以前に仏教が流通していた証拠であるという。しかし Nāgārjunikoṇḍa 碑文の記事もはなはだ漠然としたものであり、むしろ紀元前後から以後のビルマ古代史については、各時代のシナ史料がはるかに詳細かつ具体的な記録を残しているのである。

2 ビルマ・ルートの開始と撣国

重慶に後退した中国国民政府に対する戦略物資補給路としてビルマ＝ルートの名が急に世人の注目を浴びようになったのは、日本が太平洋戦争に突入する直前、1940 年の後半のことであったが、ビルマ＝ルートは実はこの時突如として出現したのではなく、その起原ははるか古代に遡るものである。

漢の武帝が北辺を脅かす匈奴を駆逐せんとし、西方の大国たる大月氏と同盟を結ぼうと計り、博望侯張騫を派遣したことは、東西交渉史上画期的なできごとであった。張騫は 13 年にわたる苦難の後、前 126 年（元朔 3）ようやく長安に帰ることができた。彼は 大月氏 との同盟を結ぶという使命を果たすことはできなかったが、その旅行によって西域諸国の地理・風俗・物産などの知識は、はじめて公式的かつ直接的にシナに伝えられた。その時の報告の中で、彼が大夏（Bactria）に行った際、蜀（四川）の布と邛（邛都＝西昌）の竹杖を見たので、どこから来たのか訊ねると、東南数千里にある身毒（Sindh＝India）から来るのであって、身毒はまた邛都の西 2,000 里ばかりの所にあることを知らされたということを述べている。そこで彼は 大夏 に達するのに今の雲南あたりからインドを経て行く方がよいと進言したから、武帝は王然于など十余人に命じて、この道からインドに赴かせようとしたが、昆明（民族名）にさまたげられて目的を達することができなかった。この記録は雲南あたりの諸民族が、アジア

の2大文明国であったインドとシナの間に介在して、紀元前から商業活動に携わっていたことを明かにしており、後世のいわゆるビルマ＝ロードの存在を暗示するものである。

一体シナと南方諸国との交通は、初め主として陸路によっていたもので、諸葛亮（字は孔明、181～234）が雲南方面の経略に力を尽し、今でもその遺蹟と称するものが多数この地方に残されているのは、この交通路の利を得ようとしたためであった。南海諸国との海上の交通の比重が大きくなるのは唐宋以後のことであって、その港として広州（広東）の名が大きく脚光を浴びて浮き上がってくる。これに対してビルマ＝ルートの一環として歴史に名を止めているのは永昌である。

永昌 Yung-ch'ang は雲南省西部の小都市で、徳宏タイ族・チンポ族自治州に属する現在の保山県である。この地方は古くは哀牢という民族の住地であったが、後漢の明帝（顕宗）の時、永昌郡を置いたのがその初めであって、その事情を後漢書の南蛮西南夷伝は次のように伝えている。

「永平十二年（69）哀牢王の柳貌は子を遣し、種人を率いて内属す。其の邑の王と称する者は七十七人、戸は五万一千八百九十、口は五十五万三千七百十一、西南に洛陽を去ること七千里なり。顕宗は其の地を以て哀牢・博南の二県を置き、益州郡の西部都尉の所領の六県（不韋・比蘇・嵩唐・標榆・邪竜・雲南）を割き、合わせて永昌郡と為す<中略>。哀牢の人は皆鼻を穿ち耳を僂す。其の渠帥の自ら王と謂う者は、耳の皆肩を下ること三寸、庶人ならば則ち肩に至るのみ。土地は沃美で五穀・蚕桑に宜し。采文を染めるを知り、罽毼・帛罽・蘭子（蘭子）の細布を繡い、織りて文章と成すこと綾錦の如し。梧桐木の華有り、績いで以て布と為す。幅の広きこと五尺、潔白にして垢汗を受けず。先づ以て亡人を覆い、然る後に之を服す。其の竹の節は相去ること一丈、名づけて濮竹と曰う。銅・鉄・鉛・錫・金・銀・光珠・虎魄・水精・瑠璃・軻蟲・蚌珠・孔雀・翡翠・犀・象・猩猩・豹獣を出だす。」

とあるのがそれで、土地の規模や奇妙な風俗とともに、豊かな物産——といってもその内のあるものは南海諸国の産物であろうが——を知ることができる。そこでこのような南海産の商品が、一体どこから齎されたのか問題になるのであるが、それは先に引用した文献の少し先の方を読めば、ただちに想像することができよう。

「永年六年（94）、郡の徼外の敦忍乙王の慕延が義を慕い、使訳を遣し犀牛・大象を献ず。九年、徼外の蛮および掸国王の雍由調は重訳を遣し国の珍珍を奉る。和帝は金印紫綬を賜い、小君長にも皆印綬・錢帛を加う<中略>。永寧元年（120）、掸国王の雍由調は復た使者を遣し、闕に詣り朝賀し、楽および幻人を献ず。変化を能くし、火を

吐き、自ら支解し、牛馬の頭を易え、又跳丸を善くし、数乃ち千に至る。自ら我は海西の人なりと言う。海西は即ち大秦なり。罽国は西南大秦に通ず。明年の元会に安帝は楽を庭に作し、雍由調を封じて漢の大都尉と為し、印綬・金銀・綵繪を賜わること各々差有る也。」

この引用文に現われる罽国というのが、現在ビルマやタイの北部山岳地帯に居住している Shan という民族の対音を示しているのかどうかには異論のあるところであるけれども、罽国がほぼ現在のビルマの位置に比定されることには学者の意見が一致している。この国は西南の方は大秦、すなわち Roman Orient に通じていたというのであって、大神楽のようなことをやる幻人は、その支配下にあったエジプトの Alexandria が幻術の本場であったことから、そこの人であったであろうというのが一般に認められている見解である。この見解の傍証ともいべき記録は、同じく後漢書の西域伝に、

「大秦国は一名犂鞬、海西に在るを以て、亦た海西国とも云う<中略>。桓帝の延熹九年(166)に至って、大秦王安敦は使を遣し、日南(順化)徼外より、象牙・犀角・瑇瑁を献じ、始めて乃ちひとたび通ず。其の表貢する所は、並びに珍異無し。疑うらくは伝者の過りならんか。」

とあり、安敦は哲人皇帝として有名な Marcus Aurelius Antoninus (161—180 在位) に比定され、その使者と自称する者が海路越南のあたりから朝貢したことや、罽国王の献じた海西の幻人というのが、大秦の者であったことを推測させるわけである。罽国がかなりの大国であったことは、遠く大秦と交易していたということのほかに、その王に与えられたのが金印紫綬であったことから想像される。漢の制度では、金印紫綬は諸王か宰相以上でなければ与えられないからである。そして永昌の位置が現在のビルマとの国境に極めて近いことから見て、その南の方にあった罽国という大国が、ほぼ今のビルマに当たる地方にあったことは、ほとんど疑問の余地のないところであろう。

このように見てくると、遅くも 1 世紀の末にはビルマに罽国という大きな国が成立していたこと、その国とシナとの間にビルマルートを通じる公的な交渉が始められていたこと、およびこのルートのシナ側の要衝として永昌郡があったことなどが分かるであろう。ただ当時のビルマは、現在その大部分を占めている Tibeto-Burma 系の民族の国ではなく、民族の移動が主として北から南に押し出すような形で行われてきたことや、現在の民族配置から見て、その先住民族であった Mon-Khmer 系の民族によって支配されていたと考えられている。

3 林陽という国

シナとビルマとの交渉は、後漢の滅亡によって中絶し、桴国に関する所伝もその後は絶えてしまうのであるが、三国時代に江南にあって北方の魏・西方の蜀と鼎立していた呉の孫権が南シナからインドシナの経略を志し、その交・広2州の刺史であった呂岱が、225～230年ごろ宣化従事の朱応と中郎の康泰とを、ほぼ今のカンボジアを中心とした南方の大国扶南に派遣したことなどから、南海に関するシナ人の知識は急速に増大することとなった。その結果、それ以前とは別の海上の経路から、ビルマに位置づけられると考えられる新しい名の国が、桴国に代わって現われてくる。それがこれから述べようとする林陽という国である。

林陽国またはそれと関連のある記録は、水経注・太平御覧などに、僅かな佚文が残されているに過ぎない。その内の4佚文を次に掲げてみよう。

「康泰の扶南土俗に曰く。扶南の西南に林陽国有り、扶南を去ること七千里なり。土地は仏を奉じ、数千の沙門有りて、戒を持す。六斎日は魚肉は国に入るを得ず。一日に再市あり。朝市は諸の雑米・甘菓・石蜜を、暮市は但だ香花を貨す。」(太平御覧巻787)……(1)

「外国伝に曰く。林陽より西に去ること二千里に奴後国あり。二万余戸ばかりあり。永昌と界を接す。」(太平御覧巻790)……(2)

「南州異物志に曰く。林陽は扶南の西七千余里に在り。地は皆平にして博し。民は十余万家あり。男女善を行い、皆仏に侍す。」(太平御覧巻787)……(3)

「竺枝の扶南記に曰く。林陽国は金陳国を去ること歩道二千里なり。車馬は行くも、水道無し。国を挙げて仏に事う。一道人有り。命過ぎて焼葬す。之を数千束の樵に焼く。故に火中に坐すなり。乃ち更めて石室中に著く。從來六十余年、尸故の如く、朽ちず。竺枝は目に之を見る、云々」(水経注巻1)……(4)

以上は林陽に関係のある佚文のほとんどすべてを、ほぼ年代順に排列したものである。(2)の外国伝とあるのは、(1)と同じく康泰の呉時外国伝のことであり、(3)の南州異物志は呉の丹陽の太守であった万震の撰、(4)は南北朝時代の宋(420～79)の時の編著といわれ、別の佚文に文帝元嘉20年(446)に檀和之が林邑を破った記事のあることから、それ以後の撰述と考えられている。康泰は扶南において、その王范湖が中天竺に派遣した親人蘇物が伴い帰った陳・宋等2人のインド人から西方の事情を聞いたものであり、万震はシナにあって朱応・康泰等のもたらした南海知識を編集したに過ぎ

ないと見られるに對し、インド人と思われる竺枝（太平御覽には竺芝）は自ら林陽で諸事を目睹しているのであって、最も信頼のおける記録であろう。

しかし(1)~(3)の記事と(4)とでは、その間に約200年の距りがあるから、林陽といっても同じ国を指すのか問題があるであろう。シナ文献では、国と国との間の距離を云うのに、それぞれの首都の間のことを示すのが普通である。してみると扶南から林陽までの距離は、Phnom-Penhの東南にある扶南の古都 Vyādhapura(現在のBanam)からのものと考えられる。ところが(1)では扶南の西南7,000里に林陽があるといい、(3)では西に7,000余里であるといい、距離はほぼ一致するが方角が若干異なる。しかるに(1)と同じ著書による(2)では、林陽の西2,000里にある奴後国は永昌に界を接しているという。奴後は Nāga または Nagūr の対音かと思われ、上ビルマの北端か Assam の北東端あたりと推定される。この国が林陽の西2,000里にあるというのならば林陽はビルマのどこかに求められる可能性が強い。一体にシナの古い文献に現われる距離や方角がどの程度に正しいか、はなはだ疑わしいのであるが、相対的な距離の遠近については一応正しいと考えてよい。方角については、東南アジアに関する限り、著しく南寄りに述べている場合が多く、およそ90°位を右廻りに回転させることによって、正しい方向を見出し得ることが少なくない。たとえば(1)が正しいとすると、林陽はマライ半島の中部かスマトラの北部の方角にあることになり、(3)が正しいとすればマライ半島の根部ということになろう。ところが林陽国は(3)によれば大きな平野で、民家10余万家もあり、(1)によれば僧侶だけでも数千人という大きな仏教都市である。それに一日に2度も市が開かれるというのは、当時とすればずいぶん商業の益なところといわねばならない。そのうえ(2)によれば、林陽の位置は永昌に界を接する奴後国とは2,000里で近く、扶南とは7,000里ではるかに遠いのである。

扶南よりも永昌に近く、しかも大きな平野に位置しているということになると、林陽はどうしても Irrawadi 川の流域の平野と考えざるをえない。そしてこの推測は(4)にも当てはまる。竺枝は林陽は金陳国を去ること歩道2,000里で、陸路はあるが水路はないと述べ、その方角については触れていない。ところが金陳国というのは

「異物志に曰く、金隣は一名金陳、扶南を去ること二千余里ばかりなり。地銀を出だす。人民多く、獺を好む。大象は生得すれば乗騎し、死すれば則ち其の牙齒を取る」(太平御覽卷790)……(5)

とあるように金隣国ともいった国で、金ではなくて銀を産出し、一般に梵典の Suvarṇabhūmi、巴利文献の Suvannabhūmi、ギリシア・ラテンの Chryse と同じものを指していると解される。G. Coëdès はさらにこれを限定すれば、金隣は Salween 河口

の北にある Thaton であると主張している。これらの比定は金隣または金陳という名称は、意味を表現しているという立場に立っているわけであるが、これとは別に音訳であるという解釈も成り立つのではあるまいか。

現在ビルマの Salween 川の中下流を主として、Irrawadi 川のデルタ地帯や一部はマライ半島 Mergui 地区の山の中などに Karen と呼ばれる民族が散在している。この Karen はインドシナにおける Sino-Tibet 語族に属する Sino-Thai 語族の最古の移住者といわれ、現在は従順な白カレンと独立意識の強い赤カレンに大別され、後者は Karenni 州において唯一の土侯国を形成していた。彼等は 2 世紀の末ごろに西南シナから東北ビルマに移住したという説もあり、金隣というのは Salween 流域にあった Karen (古音は Kanran) の国の音訳ではあるまいか。そして金陳の陳は、金隣の隣を転写の際に誤ったのではないかと推測される。

ところが(5)によると扶南から金隣まで 2,000 余里、(4)によると金陳から林陽までは陸路で 2,000 里であるというから、扶南から林陽までは合計 4,000 余里で、その真中あたりに金隣があることになる。しかるに(1)と(3)では扶南と林陽の距離を 7,000 里としているので、その差が余りにも大きすぎるのに不審を感じるのであるが、これは遠い国ほど、より遠く表現されがちであることや、両者の経路のとりかたのちがいを考慮してみることができるであろう。

このように考えて来ると、方角を修正すれば扶南の西北 2,000 里に金隣、その西北 2,000 里に林陽、その北 2,000 里に奴後があって永昌と界を接しているというように解釈できる。そして金隣が Salween 中下流に、奴後が永昌のすぐ隣りとすれば、その中間の林陽はほぼ Irrawady 中流域という推定が成り立つ。N. Ray は林陽を古 Prome に比定しおり、その可能性は大きいと思われるが、その北の Pagan である可能性も考える必要があろう。いずれにせよ林陽をビルマ内に求めることに誤りがなければ、ビルマにおける仏教国の存在が 3 世紀の初期から 5 世紀の中ごろまで証明されたことになり、これまでのところ碑文や遺物、遺蹟によっては紀元 500 年までしか遡れないビルマ仏教およびその歴史の知識が、300 年位遡行できるわけなのである。

ただ残念なことは、林陽 Lin-yang [B. Karlgren の古音推定によれば Liəm-(d)_{C~}iang] の名称が意味を示すものと考えても、また音訳であると考えても、はっきりこれに比定さるべき地名を見出しえないことである。

4 朱 江 と 驃

林陽の名は竺枝の扶南記以後、その名を見なくなるが、これに代わって唐代に密接な交渉を持つようになったビルマの国に驃国の姿が大きく浮かんでくる。

驃 P'iao というのは Pre, Pyé, Pyū など、当時この国を形成していた民族に対して、ビルマ人が与えていた呼称の音訳である。しかし Pyū という民族の名がシナに知られたのは唐代のことではなく、かなり古い時代に遡る。晋の常璩の撰した華陽国志巻4（南中志）の永昌郡の条に、

「明帝の永平十二年(69), 哀牢の柳狼が子を遺し奉献す。明帝即ち郡を置き、蜀郡の鄭純を以て太守と為す。属県は八、戸は六万、洛（洛陽）を去ること六千九百里、寧州の極南なり。閩濮・鳩獠・僂越・裸濮・身毒の民有り。」

とあり、後漢の時に置かれた永昌郡の地に、僂越という民族が居住していたことを述べている。また後漢書南蛮西南夷伝の哀牢夷の条には、晋の郭義恭の広志を注に引き「剽国は白桐木有り」（艺文類聚巻88 太平御覧巻956 所引）

といい、宋の王溥等の編纂した唐会要巻100には、

「貞元十八年(802)春正月、南詔の使来朝す。驃国王始めて其の弟悉利移を遣して来朝す。華言は之を驃と謂い、自らは突羅朱と謂い、闍婆人は之を徒里掘という。古来より未だ嘗て中国に通ぜず。魏晋の間に西南異方志及び南中八郡志を著す者有りて云う、永昌は古の哀牢国なり。伝え聞く、永昌の西南三千里に驃国有り。君臣・父子・長幼の序有り」と。

とあり、魏晋の間(212~420)の著という西南異物志・南中八郡志というのは、隋書・旧唐書の経籍志・新唐書艺文志などにも収録されていないが、おそらく呉の万震の南州異物志・晋の常璩の華陽国志の南中志を指すものと思われる。そして魏晋のころの驃に対する知識として、永昌の西南3,000里にあって、君臣・父子・長幼序ありと述べ、その文明国なることを形容している。

これらの諸書に見える僂・剽のほか、漂（華陽国志巻4）・瀾（唐道生撰法苑珠林巻36に引く広志）などの文字も、すべて驃と同じく Pyū の音訳であろうが、唐会要の記述で注目されるのは、彼等の名称が中国では驃・自称は突羅朱・闍婆人は徒里掘とさまざまな形で示されていることである。これとほとんど同文の記述は、旧唐書・北宋樂史の太平寰宇記・宋末元初の馬端臨の文献通考などにも見え、その典拠の一なるを思わせる。

これらの呼称のうち、シナ名の驃はビルマ人による呼称がビルマ＝ルートを通じて伝えられたものであるのに対し、自称の突羅朱（旧唐書では突羅成）はその首都 Prome のサンスクリット名 Śrīkṣetra のビルマ訛 Tharekhittara の対音、ジャワ人による呼称の徒里掘は 11 世紀末と世紀初頭の Talaing (Mon) の碑文に見える Tirčul に比定されている。この Tirčul については唐の前の隋代の記録に既にそれと思われるものが現われている。すなわち隋書の南蛮伝の真臘の条に

「真臘国（カンボジア）は林邑（＝Champa＝南 Viet-nam）の西南に在りて、本は扶南（古い Khmer の大国）の属国なり。日南郡（順化）を去ること舟行六十日にして（至る）。南は東渠国に接し、西に朱江国有り〈中略〉。其国は参半・朱江二国と和親し、しばしば林邑・陀洹二国と戦争す」

とあるカンボジアの西にあり、友好関係を保っている朱江というのがそれである。丁謙は朱江をタイ東境の南猛河浜に、参半をその東の今のラオスの南境に、陀洹をバンコクの北に比定しているのであるが、陀洹は釋陀洹（唐会要巻 99 など）とも見える国で Rangoon の有名な Shwe Dagon の対音と考えられ、参半は不詳であるが、朱江こそ Tirčul の対音でビルマに当たると考えられる。それは新唐書の真臘伝と、先に引用した隋書のそれとを比較してみると、一目瞭然たるものがあるからである。すなわち新唐書の真臘伝には

「真臘は一に吉蔑（Khmer）という〈中略〉。西は驃に属す〈中略〉。世々参半・驃と好を通じ、環王・乾陀洹と数々相攻む。」

とあって、隋書の参半・朱江が参半・驃に、また林邑・陀洹が環王（林邑の新名称）・乾陀洹に対応するものであることは明白である。したがって驃はすなわち前代の朱江である。新唐書の驃国伝がその冒頭に、「驃は古の朱波なり」といっているのは、おそらく朱江の譌ではないかと考えられる。この推定に誤りがなく、また朱江が Tirčul の対音を示すものであるならば、Pyu の自称という Tirčul の名は、それに近い音で早く真臘（Khmer）に知られていたことになり、その名称の起原は隋代（581～618）にまで遡りうることになるのである。

さて驃国の伝について、最も詳細でまとまっているのは新唐書のそれである。新唐書の驃国伝は、樊綽の蛮書のほか、韋臯による驃国楽の記録、賈耽の撰した各種の地理書などをよく利用して成ったもので、他書に見えない貴重な記録を今日に伝えている。そこで以下に新唐書驃国伝の記述を主として参考にしながら、当時のビルマのようすを述べてみよう。

驃とシナとの国交は、はじめ南詔の仲介で始まった。南詔は雲南省にあった Tibeto-

Burma 系の民族の建てた国で、大暦 4 年 (779) に即位した異牟尋の時に極盛期を迎え、吐蕃 (Tibet) と結んで唐に侵寇し、チベット王から日東王の称号を与えられたが、チベットの高圧的な態度に不満を懷き、唐に帰順するにいたった。そして劍南西川節度使であった韋臯に楊加明という使者を遣し、夷中の歌曲を献じ、かつ驃国をして楽人を進めしめた。これは徳宗の貞元中 (785~804) のことである。韋臯は「南詔奉聖樂」を作って奏樂のさまを徳宗に報告している。この時の驃国王は雍羌という人であるが、南詔が唐に帰したことを聞いて内附の心あり、貞元 18 年 (802) 春正月、雍羌は子 (唐会要などが弟とするは誤り) の悉利移城主舒難陀を遣し、彼は南詔の使者に伴われて闕に詣でた。この時の奏樂のようすは、白居易の「驃国楽」の詩に見え、また韋臯の記録に詳かである。

徳宗はその功に対し、舒難陀に太僕卿の位を授けて帰したことが新唐書に見えているが、白居易が徳宗に代って撰した「与驃国王雍羌書」という文が白香山集巻 40 に見えている。その文中に

「今、卿 (驃国王雍羌) に檢校大常卿を授け、並びに卿の男舒難陀及び元佐摩訶思那等二人にも亦、各々官を授く」

ということばがあり、雍羌に檢校大常卿、その男の舒難陀に太僕卿を授けたものと推測される。なお王名の雍羌は、このころ *Prome* を支配していた国王が、*vikrama* を称号としていたことから見て、またビルマ人は *r* を *y* に発音することから考えると、その称号の音訳ではないかと思われる。

さて新唐書驃国伝の伝えるこの国の都城や風習をそのまま引用してみよう。

「驃王は困没長を姓とし、摩羅惹を名とす。其の相 (宰相) は名づけて摩訶思那という。王の出づるに輿は金繩牀を以てし、遠ければ則ち象に乗り、嬪史数百人なり。青壁を円城と為し、周百六十里。十二門ありて四隅に浮図を作り、民は皆中に居る。鉛錫を瓦と為し、荔枝を材と為す。俗は殺を惡み、拝するに手を以て臂を抱き、額を稽して恭を為す。天文に明るく、仏法を喜び、百寺あり。琉璃を甍と為し、錯めるに金銀を以てす。丹彩・紫鉞は地を塗り、覆うに錦罽を以てす。王居も亦かくの如し。民は七歳にして髪を祝し寺に止まり、二十に至りて其の法に達せざる有らば、復して民と為す。衣は白氈・朝霞を用い、蚕帛は生を傷けるを以て、敢て衣とせず。金花を載せ、翠帽を珠り、絡すに雜珠を以てす。王宮に金銀 2 鐘を設け、冗至らば香を焚き之を撃ち、以って吉凶を占う。巨白象の高さ百尺なるものあり。訟する者は香を焚き象の前に跽き、自ら是非を思いて退く。災疫あらば、王もまた香を焚き、象に対して跽し、自ら咎む。桎梏 (手枷・足枷) なく、罪ある者は五竹を束ねて背を捶つこと、重

き者は五、軽き者は三なり。人を殺せば則ち死せしむ。土は菽・粟・稻・梁に宜しく、蔗の大なること脛のごとく、麻・麦なし。金銀を以て錢と爲し、形は半月の如く、登伽佗と号し、亦た足彈佗と曰う。膏油なく、蠟雜香を以て炷に代う。諸蛮と市するに、江猪・白・琉璃氈・罌缶を以て相易す。婦人は頂に当たりて高き髻を作り、銀珠を飾る。婆裙を青くし、羅段を披す。行くに扇を持たせ、貴家の者は傍五、六に至る。」

これを読めば、りっぱな都城 (Prome) のようす、きらびやかな風俗、仏教の不殺生戒を重んじ、象を崇拝していたありさまなどが明かであろう。またその位置や四至などについては、同伝に

「永昌の南二千里に在り、京師 (長安) を去ること万四千里。東は陸真臘 (カンボジア)、西は東天竺 (Kāmarūpa) に接し、西南は墮和羅 (Dvāravatī=タイの古都 Ayuthia あたりを中心とする Mon 民族の国)、南は海に属し、北は南詔 (雲南) なり。地は長さ三千里、広さ五千里、東北は袤長し、羊苴咩城に属す。凡そ属国は十八 (中略)。凡そ鎮城は九 (中略)。凡そ部落は二百九十八、名を以て見ゆる者三十二。 (下略)」

とあるのによって、その大体を窺うことができる。しかしここに述べられている驃が属国と称するものの中には、Java 島や Bali 島と推定されるものまで含まれており、そのまま信じることはできない。おそらく驃国の使者が誇大に語ったことをそのまま記録したものであろう。当時の Java に君臨していた Śailendra 王家は、インドシナにも勢力を伸ばし、驃と親しかったカンボジアも一時その支配下におかれたことから考えると、驃の勢力はせいぜいマライ半島の一部に及んだに過ぎないであろう。けれどもこうして勢力圏を接するようになったビルマとジャワの間で、たがいに交渉のあったであろうことは容易に推測されることであり、驃国伝に驃からマライ半島を経てジャワ方面に向かう経路が述べられているのは、そのような情勢を反映するものである。

この驃国伝とは別に、新唐書は賈耽の地理書からの抜萃である 7 路程を、地理志の最後に付載しており、ふつう賈耽の道里記とよばれているが、その第 6 番目の「安南通天竺道」というのは、今日の河内 (Hanoi) あたりから雲南・ビルマを経てインドにいたる陸路を説明したものであって、当時のビルマ周辺の地理を知るのに重要な文献となっている。かつて P. Pelliot が第 7 番目の「広州道海夷道」と併せてその考証を発表して以後、すでに 60 年を経ているが全体としてこれを研究した者はその後に現われていない。そのためもあって、まだ不詳の部分も少なくないが、大体のところは分明になっているので、「安南通天竺道」のビルマに関連のある部分を次に引用し

てみよう。この道は Hanoi あたりからソンコイ川（紅河）を遡って南詔支配下の雲南にはいり、拓東城（昆明）・太和城（旧大理）・羊苴咩城（現大理）を経て永昌故郡（保山）にいたり、いよいよビルマの国境に近づくわけである。永昌故郡から先を原文のまま引用すれば、

「又西渡怒江（Salween R.）至諸葛亮城二百里，又南至楽城（蛮書の磨些楽城）二百里，又入驃国境，経万公等八部落，至悉利城（驃国伝の悉利移城）七百里，又経突旻城至驃国（Prome）千里，又驃国西渡黒山至東天竺迦摩波国（Kāmarūpa = Assam）千六百里〈中略〉。一路自諸葛亮城西去騰充城（騰衝＝騰越）二百里，又西至弥城百里，又西過山二百里至麗水城。乃西渡麗水（Irrawady R.）竜泉水二百里至安西城。乃西渡弥諾江水（Chindwin R.）千里至大秦婆羅門国〈下略〉」

と述べ、諸葛亮城から南下してビルマにはいり、イラワジ川を下って Prome にいたり、そこから西に向かって Arakan Range を越えて東インドに達する道と、諸葛亮城から西に向かい、上ビルマを通してアツサムの北東部にいたる道のあったことを伝えている。この道里記の記述と、驃国伝に見える属国・鎮城・部落などの名称とを併せて考えてみると、驃国の範囲は現在のビルマのそれはほぼ一致していたことが分かる。

ところがこうしていったん開かれた驃と唐との国交は、たちまち杜絶してしまった。それは異牟尋が元和3年(808)に死ぬと、南詔と唐の関係はふたたび悪化し、驃に対しても侵寇を加えるようになり、大和6年(832)はその民3,000人を掠して拓東に移す、というようなことになったからである。このため宋代になると、文献には驃国の名を見ても、それが実際どのような国であったかについて分からなくなっていたものと見え、驃に代わってビルマを支配するようになった、同じ Tibeto-Burma 系の民族に属する蒲甘（Pagan）が初めて入貢した時、これを小国扱いにしようとして改めた事情を、宋史巻489 蒲甘伝は次ように伝えている。

「蒲甘国は崇寧五年(1106)使を遣し入貢す。詔して礼秩を注輦（čola）と視せしむ。尚書省曰く、注輦は三仏齊（Śrī-vijaya. スマトラのパレンバンを中心とする南海の大国）に役属す〈中略〉。今の蒲甘は大国なり。王、附庸の小国と下視す可からず、大食（Arabia）・交趾（東京）諸国の如くせんことを欲すと。」

というのがそれであって、シナで驃の名が忘却されたのも無理からぬことと思うのは、本家のビルマでさえも、Pyu の名は 13 世紀までかろうじて残っていたが、それ以後は全く消滅してしまっていたからである。(1962.8.27)

ビルマの古代史について

付記 以上は主としてシナ史料によって、ビルマ古代史の諸相をあらまし述べたものであるが、あまりに専門的になるのを避けるため、脚注や引用文献は一切省いてある。したがって異論のあることや、私の意見であって、その証明には、詳細な考証を掲げなければならない部分がいくつかあるけれども、繁雑で読む人を徒に悩ますおそれがあるので、これもまた省いてしまったことをおことわりしておく。なお東南アジアの地図を見ながら読んでいただければさいわいである。